

## 注意傾向の個人差による行動および認知の差異の検討

発表者：福井さやか

指導教員：中間玲子

### 【研究の目的】

本研究では、注意傾向の個人差によって実行機能や認知に差異があるのかということについて検討することを目的とした。注意傾向を質問紙によって測定し、注意傾向に個人差があるのか、また、注意傾向が行動や認知とどのように関わっているのかを検討した。その際、自分自身ではどのように認識しているのかについて質問紙および実験によって検討した。

### 【論文構成】

第1章 本研究の課題	第4章 考察
第1節 本研究の問題	第1節 注意・対人スタイル診断テストについて
第2節 先行研究	第2節 注意傾向個人差と失敗傾向について
第3節 本研究の目的	第3節 注意タイプによる失敗傾向の差異について
第2章 調査の方法	第4節 注意傾向による実験結果の差異について
第3章 結果	第5章 総括
第1節 尺度の検討	
第2節 注意タイプの個人差による失敗傾向の差異の検討	
第3節 注意傾向による実験結果の差異	

### 【研究概要】

私は、他者と比べて注意を適切に向けられていないと感じる場面が今まで度々あった。このような経験を通して注意傾向の個人差があり、その個人差によって行動や認知に差があるといえるのかを検討したいと考えた。先行研究を読むと、先行研究にはいくつかの問題が指摘されていたり、質問紙による調査と実験による調査を行い注意傾向と行動の差異を検討している研究は少なかったりするため、本研究をするに至った。

本研究の目的は、注意傾向の個人差によって実行機能や認知に差異があるのかということについて検討することであり、質問紙によって検討を行った。また、実験によって注意傾向による行動の差異について検討した。

質問紙には、注意・対人スタイル診断テスト（TAIS：Test of Attentional and Interpersonal Style）日本版の30項目、失敗傾向質問紙45項目のうち25項目、EC（Effortful Control）尺度の注意の制御下位尺度12項目を用いた。TAIS日本版と失敗傾向については0～4点の5件法、EC尺度については0～3の4件法で回答を求めた。TAIS原版の注意尺度は6尺度であったが内の一貫性が認められなかったため、因子分析を行った。また分析には24項目を用いた。その結果2因子である程度の概念のまとまりを見ることができ、たくさんの刺激を効率的に統合できると認識している“注意の焦点化”と、刺激が多くなると負担が過大になってしまうと認識している“オーバーロード”とすることができた。

失敗傾向についても因子分析を行い、22項目を用いた。先行研究と同様に“アクションスリップ”、“衝動的失敗”、“認知の狭小化”とすることができた。アクションスリップは、実行中の行

動への注意が不十分なことによる失敗、衝動的失敗は非機能的衝動性の特徴と一致する失敗、認知の狭小化は認知の範囲が狭く硬直化してしまうことによる失敗を示す。

本研究ではこれらの相関について検討した。オーバーロードと失敗傾向との間に有意な正の相関が認められた。これは、刺激が多くなると負担が過大になってしまう人ほど失敗をしやすいくことを示す。オーバーロードを測る項目と失敗傾向の項目それぞれの内容が類似しているために同じような回答をしやすかったからではないかと考えられた。また、オーバーロードとECの間に有意な負の相関が認められた。注意を適切にコントロールできれば、たくさんの刺激があっても負担が過大になつてしまわないようにすることができるのではないかと考えられる。注意の焦点化と、失敗傾向、ECとの間には有意な相関は認められなかった。これは、注意の焦点化はたくさんの刺激を効率的に統合できると認識しているかどうかを測定する内容の項目ばかりであり失敗傾向の項目やECの項目などとは類似しないものが多い。そのためこのような結果になったのではないかと考えられる。

注意の焦点化とオーバーロードの得点それぞれの高群と低群を組み合わせ4つのタイプを作り、タイプごとで失敗傾向の差があるのかどうかを検討した。その結果、アクションスリップ、衝動的失敗、認知の狭小化、ECで注意タイプの主効果が有意であった。そして刺激が多い場面で負担が過大になつてしまうと認識している人ほど失敗をしやすいくのではないかと考えることができた。注意の焦点化とECの得点の高群と低群の組み合わせによつても注意のタイプを4つ作った。その結果、すべての失敗傾向について注意タイプの主効果が有意であった。注意の焦点化とECを組み合わせると、失敗傾向にはどちらかのみが影響しているわけではなく、どちらも影響しているのではないかと考えられた。

実験については、先行研究から注意傾向の個人差による行動の差を検討するためには数字課題、ストループ課題が妥当であると考えられた。それに加えて、選択的注意に関する動画課題も用いて検討を行った。注意の焦点化の低群と高群の間で、ストループ課題の一致課題不一致課題の時間差において有意な差が見られた。注意の焦点化ができる人は書かれた文字に惑わされず、書かれた文字の色を読むことができたため、このような結果になったと考えられる。質問紙による検討では失敗傾向、ECに影響しているのはオーバーロードであったが、実験による検討ではストループ課題のスコアに影響を及ぼしていたのは注意の焦点化であった。自分自身の認識と実際の行動との違いがあることを示唆していると考えられる。

#### 【主要参考文献】

- ・加藤孝義・和田裕一・岩崎祥一（2003） 注意・対人スタイル診断テスト（TAIS）日本版における注意尺度の妥当性の検討 心理学研究第74巻 第3号 263-269
- ・Nideffer, R. M. (1976) Test of attentional and interpersonal style. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 394-404.
- ・山形伸二・高橋雄介・繁栞算男・大野裕・木島信彦（2005）成人用エフォートフルコントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究第14巻 1号 30-41
- ・山田尚子（1999） 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究 47 501-510.